

世界哲学のための言語・論理

納富信留(東京大学)
岡本賢吾(東京都立大学)
岡田光弘(慶應義塾大学)

これまで西洋哲学の基盤の上で展開されてきた「哲学」を、根本から反省することで多元的な視野で再構築する「世界哲学 World Philosophy」のプロジェクトが進んでいる。その一つの課題として、実際には、ギリシア語、ラテン語、フランス語、ドイツ語、英語といったヨーロッパの諸言語で語られ、それを基盤に分析された議論が「哲学」とされてきた歴史への反省がある。普遍言語が可能か、自然言語の間の違いはあるか、論理は言語から独立か、日本語は非論理的か、といった問題から、あらたな哲学言語と論理の可能性を探る必要がある。

本ワークショップでは、3名の提題者がそれぞれの専門領域から、以下の問題意識に基づいて提題を行い、参加者で自由に議論して問題を考えていきたい。

哲学の所謂グローバル化は、現状では「英語」での論文執筆・研究発表という一元化を前提としている。国際学会で多数の言語を同時に相互にやりとりすることは実践的に不可能と思われており、国際ジャーナル等も英語で投稿しないと読者と評価が得られない現状がある。この状況は世界中の哲学者に共通の場を提供するという大きな便宜を有するものの、英語的な思考とそのアカデミックな枠組みへの強制加入という政治性を帯びてしまい、哲学のあり方そのものにとって重要で深刻な課題を含んでいる。この点を反省し、それを乗り越える「世界哲学の多言語的スタイル」を目指す。

哲学の営為はそれを遂行する言語と不可分であり、個別言語と無関係には豊かな哲学を生み出せない。世界での各哲学はその言語と文化の歴史の上で初めて独自性を発揮するはずである。哲学の共通言語としての「英語の利便性・独占性」を反省しつつ、全世界共通の場で対話する単一の言語というジレンマを理論的に考察する必要がある。「世界哲学」プロジェクトでは、多言語という環境を生かす一つの方策として、現在の最先端技術によって多言語間の同時通訳を行うことで多元性を生かしたままで議論することが可能か、その問題点は何かを考え、両者を言語ツールで橋渡しすることを目標にしている。

その目標にむけて、次の3つの問いを考察する。

- ① 異った文化、異った思想的伝統の間で果たして哲学的思索は翻訳可能か、可能だとしたらどのようにかという「翻訳の問い」を言語哲学・論理的に究明する必要がある。
- ② その究明のためにまず、各文化・各言語に固有のスタイルと思索内容を分析して普遍性と固有性を析出することを目指す。とりわけ、現代最先端の言語哲学・哲学的論理学・応用論理学を用いて、諸伝統の思想・言語に見られる多値性・未決定性・蓋然性・曖昧性・矛盾許容性といった非西洋的論理の特徴を解明し(東アジア分析哲学等)、新たな哲学的論理学の多元的な展開を目指す。
- ③ 翻訳の問いの解決に向けて、個別の自然言語自身の特性を研究し、複数の自然言語を横断して適用可能な理論を定め、とりわけ形式意味論(論理的意味論)を活用する。近年自然言語研究においてコンピュータシステム上で試みられている機械学習の大規模な蓄積に基づいて、複数の言語間の翻訳システムを実用

開発する。

どの国の人が自国語で哲学を話しても中国語に翻訳するときには中国哲学風になるといった、ネイティブや熟達者には無意識に備わっていることが、現在の最先端の汎用機械翻訳には備わっていない。「世界哲学」での研究は、言語データ科学的・統計学的な手法によりスタイルの分析に寄与するだけでなく、「世界哲学学会大会」のような多言語の場で実際に異った思想文化に属する人々の間で取り交わされる哲学的議論を即時的に翻訳する手段を与えることも期待される。スタイルの特性を取り入れ、英語など共通語を介さずに直接二言語間で翻訳する多言語翻訳が実現すれば、多元的な「世界哲学」に未知の可能性が開かれるであろう。

3名の提題者による報告(予定)は次のような趣旨である。

【納富信留「言語・概念分析の系譜」】

20世紀からの分析哲学の「概念分析」の手法は、「言語論的転回」により「言語分析」として遂行されてきた。そこでは、哲学の言語が「論理」を扱う純粋な言語であり、世界のあり方・真理を示すという強力な前提が働いている。そこでの「分析」の理念は、直接にはカントによる「分析、総合」区別に由来するが、より大きな動向としては古代ギリシア以来の西洋哲学の前提にある。

第一に、プラトンのイデア論が「言葉における探求」として提案され、言葉の吟味をつうじて真理を明らかにする「対話法(ディアレクティケー)」として哲学の方法となった。それは、アリストテレスの経験主義での「言語」と魂の受動状態との相関という図式を経て、言語を分析することで世界の真理を取り出すことができるという理念につながった。さらにユダヤ・キリスト教にある「神・ロゴス」による世界創造が、この世界自体をロゴスとして捉える基盤となる。以上の歴史を批判的に検討しながら、言語を分析するという哲学のあり方を根源から反省したい。

【岡本賢吾「(生活形式)のプラットフォーム論理を探る」】

人工知能研究の定礎者のひとりマッカーシーは、自らの研究の目標を「常識の形式化」と要約したが、近年のこの分野の急速な発展は、私たちが自然環境と歴史的伝統の双方に深く埋め込まれた存在者であること、つまり、いわゆる「embeddedness」(ウィトゲンシュタイン的には「生活形式」、ハイデガー的には「被投性」、パース的には「習慣」等に対応しよう)にますます焦点を当て、「常識」概念を、ただの日常知を超えた、embeddeness における私たちの特徴的で多型的な概念形成の問題として捉える方向に進んでいる。こうした探究における共通基盤として貢献しうる論理(プラットフォーム論理)の可能性について検討したい。

【岡田光弘「論理と論理的言語の関係を再考する」】

論理哲学・言語分析哲学の誕生は論理言語の誕生と同時期であり、それらは相互依存関係にあったと言える。その後の20世紀の論理言語は「形式的」論理言語として発展するが、この発展は哲学から独立した(または、依存度を弱める)形で進められた。世界哲学運動の基盤の一部を担い得る「論理」を考えるには、20世紀型形式的論理言語の成立前夜に立ち戻って、哲学的「論理」の位置を確認することが重要である。この確認を通じて、例えば、概念形成や基本述語形成における論理の「形式」の本来の姿が現れると考える。又、現代の言語処理や意味論において、形式論理の合理主義的立場と機械学習の経験主義的立場との対立が広く現れてきた。両立場の関係をより踏み込んで探求することが「論理・言語」の新たな側面の理解に繋がることも指摘したい。